日本大学三島高等学校
同窓会会報

第 9 号

昭和55年3月1日
静岡県三島市文教町2
日大三島高校同窓会　発行

新しい時代の幕あけに

会長　高田菊平

八十年代という時代はどうも大変な年になりそうであります。会員の皆様方は、この激動の時代をどのように考え、とらえているのでしょうか。原油の高騰は経済の不安定感をさらに深め、省エネルギー、省資源を、そして代替エネルギーの開発と、その技術の方向さえエネルギーの面から考えなおさなくてはならないことになってきている。我々はこのような変化の激しい時代に生きていることを再認識すると共に、その変化が我々に与える影響がどんなものか常に眼を見開いていなければならないと思う。

私は同窓会の活動を通じて、機会あるごとに同窓会のもつ意義というものを話してきたつもりである。このような不透明と云われる時代こそ、その存在価値が我々にとって一つの精神的な安堵感を与えうるものであると、かたく信じているひとりである。かつて、玉津前会長は『同窓会は各委員が、変動してやまない流動社会に対処する際の力となりまさに新時代の新らしい仲間づくりにつながるものである』といわれている。まさにそのとおりである。

そしてこの八十年代に入って、まさに流動的な変化の激しい時代に突入したと云われるこの時代こそ、我々はもう一度、母校という絆に結ばれた同窓会の活動について、より身近なものとして考える必要があろうと思う。

同窓会々員も既に二万余名を数えるようになり、今年三月第二十期生を迎えることとなった。現在の活動について一つの反省の時期にきているように思う。十支部をつくりその支部を母体とした地域活動を通じて、同窓会としての理解を深め、少しずつ活動できる会員の数をふやすことがそれぞれの支部の役員にかせられた課題であろう。ひとりがひとりをさそいそれが仲間づくりへ、小集団へと広がっていく最も早い近道であると思う。いろいろな機会を求めて、会員相互が連携をとれるようにしなければならない。クラス単位の同窓会、学年単位、クラブ活動単位、職場における同窓会等々、その機会は自分のまわりをみるといくらでもころがっている。どうかそういう会がひらかれるとき、それを全体の会に結びつけるための橋わたしを幹事の方々におねがいしたい。

我々は母校の発展を願い、母校という絆で結ばれた切ってもきれない兄弟姉妹として、この存在をもっともっと鮮明にする努力をこの八十年代になしとげたいものである。会員の皆様方ひとりひとりの絶大な御協力と御支援をおねがいしてやまないものである。

最後になりましたが、玉津前会長が昨年病気で入院され、現在尚加療中であることをお知らせします。先生の一日も早い回復をお祈りして筆をおきます。（第一期卒）

会長 高田菊平氏の紹介

同窓会も母校とともに発展の歩みを、止めることなく、定例行事を中心に、各支部・各卒業年度単位に地味ながらも、確実な前進を遂げております。こうした活動も本会会長高田菊平氏によるところ大であり、名実ともに同窓会のけん引的存在であります。

氏は昭和五十三年四月、前会長玉津徳太郎先生の後任として就任多忙のなかで幹事会その他、本会行事に毎回出席いただいており、感謝の一念であります。

現在、株式会社ニュー・デルタ工業専務取締役。天城湯ケ島町出身。第一期卒業生。

工業科特集

工業科廃止について

校長　橋　和彦

本校も昨年開設二十周年記念式を無事終り、今年度から成年期にはいり、躍進すべき時代になったのであるが、とにかく、公立高の増設、大学の定員厳守、それにともなう量より質の教育方針等厳しい環境のなかで、実積を挙げることに、先生と生徒が一体となって努力している。しかし今年度は波乱も多い年であった。

まず、工業科廃止に至った経緯を述べるので、御諒承を願いたい。御承知のとおり、本校工業科は、高度成長期の第二次産業要員の必要性から、県当局の要望によって昭和三十六年四月に設立された。そしてこの十数年間卒業生は地方重要産業の中堅技術者として活躍し、社会的評価をうけて来たのである。

しかし、昭和五〇年度以降になると、工業科入学者の九六%強が進学希望になり、昨年度は卒業生の実積でも、就職は七%という状態になった。こうなると本校の工業科そのものの教育価値が薄くなってしまった。その上、工業科の進学志望者を大幅にうけいれていた三島学園の短大工科が昨年度募集停止、今年度の卒業生を出して廃止になる予定である。

以上諸般の事情により、本校は来年度工業科募集停止。その代りその定員二〇〇名を普通科に振替えることを県当局に申請した。そして昨年一〇月六日、その件が県の認可になったのである。

その間連絡不充分で、工業科卒業の同窓生諸君に御心配をかけたが、結局諒解して頂いた次第である。その際、工業科の想い出を大切にして貰いたいとの種々の要望があるので、事情の許す限り、それを実現するように母校の先生方は努力する。

付属と雖も年々日大進学が難しくなっているが、現在のところ、今年度は昨年度を上廻る実績を残す見込であるし、付属高としての成績も他校以上に向上していることが、客観的な成績評価のなかに現われている。

それから特筆すべきこととしてスケート部の工業科三年B組の小野寺正昭君が、本年度国民体育大会五〇〇〇米スケート競争において、静岡県に二十三年振りに全国優勝をもたらしたことを喜びたい。

今後の同窓生諸君の活躍と、連帯と、母校に対する御後援をお願いしたい。

工業科廃止に寄せて

工業科代表（電気科一期）　奈良橋慶行

工業科第一回入学式、それは、忘れもしない昭和三十六年四月六日、桜の花の咲きほころぶ季節でした。木造校舎の薄暗い教室の中での授業は、今でも目に浮びます。

それから十九年間たった今日、工業科がなくなるという我々卒業生にしてみれば、身につまされるような出来事です。

数年前、工業科卒業生の集まりの席上、どうも近い内に工業科が廃止されるという噂を、耳にしたことがあります。その時は、何の根拠もない噂としか思っていませんでした。

寝耳に水とは、このことで、学校側からは何の話もなく、同窓会幹事会で話題となり、その真偽の程を同窓会長に確認していただくこととなり、結果は来年度より募集を停止するとのことでした。その後学校当局との会合が再三もたれ、我々の問題が、多少でも理解してもらえるよう、話し合われました。

それでは、ここで運動の経過報告を紙面を借りて致します。

「来年度より募集停止」との結論を受けたその後、工業科各科でこの問題について、会合が繰り返し持たれました。

四科合同の準備委員会は、六月の半ばから数回持たれ、学校に提出する「請願書」及び「署名運動」の内容等の準備に、とりかかりました。この月の下旬に、四日間ほどかけて（三島・沼津等の卒業生の家を借りて、一日に三十数名から四十名が集まりました）署名用紙の発送準備をし、七月上旬に発送。（発送部数四〇五六通）それと時同じくし、新聞等にも我々の運動が報道されたのは、みなさま御存じの通りです。学校当局との話し合いが持たれたのも中頃です。又県知事を尋ね、私学の問題等、約一時間にわたって話し合ってまいりましたのもこの頃です。又発送した署名用紙が戻って来ましたのもその頃です。（発送後二日目から、送られてまいりました。多い日には、一日百四・五十通を数える日もありました。）父兄から驚きと運動の激励が、我々の手元に数通まいりました。又、新聞等で事情を知った他校の先生からも手紙がまいりましたのには、驚きとさらに、勇気づけられる思いでした。

七月三十一日、署名と左記の請願書を添えて、学校側に提出致しました。

請　願　書

日本大学三島高等学校工業科募集停止の件に関して存続要請理由と署名四、四五六名を添え請願書をここに提出致します。

昭和五十五年度よりの日本大学三島高等学校工業科募集停止の件に対し、左記の理由と署名をもってその存続を強く要請いたします。

記

一、昭和三十六年地域社会の要請により、設立された我が日本大学三島高等学校工業科を一時の時勢を見誤って、僅か十九年で廃止することは、工業教育そのものの否定であり絶対に承服できない。

高校進学者の中で工業課程を希望する者は決して少くない。

一、工業科卒業生四千余名が地域社会において、立派に中堅技術者として活躍し十分にその根をおろして来ました。

この時点で、その根を断つことは社会的見地からも損失でありまた卒業生の寄りどころを失うことは誠に忍びがたい。

昭和五十四年七月

日本大学三島高等学校同窓会
会　長　高田　菊平
同電気科代表　奈良橋慶行

ぼくらの"母校"が消える

"工業四科"を三年後廃止

日大三島高校

卒業生、存続の署名運動

三島市文教町二丁目、日本大学三島高校（橘和彦校長）が来年四月から電気、機械、土木、建築の"工業四科"を募集停止し、三年後に廃止する方向で検討していること京明るみに出、四科の同窓生らが二百から「母校の灯を消さないで」と存続を求める署名運動に乗り出した。工業四科は三年六年に設置され、これまで四千三百人余の卒業生を送り出しており、卒業生は一工業科の廃止は全く理解できない。単なる"企業エゴ"でわれわれのよりどころを失うことは絶対に承服できない」として立ち上がったもので、同窓会（沼田菊平会長、会員約二万人）も近く幹事会を開いて正式な態度を決めるという。

署名運動の準備をする三島高工業科のOBたち

日大三島高校は、さる三十三年四月に沼津高校として開校、三年後、工業四科を開設し、隆盛する日大文理学部（一年生のみ）、短期大学部と合わせ"日大三島学園"を形成していた。

ところが、日本大学（鈴木勝総長）は、今春から"国際人"を養成するユニークな国際関係学部（国際関係学科と国際文化学科で、定員は各学科百人）を同学園内に開設し、さる二十一年以来の文理学部は二年後に廃止、短大の建築、機械科も廃止し、日大三島高は国際関係学部の直轄付属校に"昇格"した。

高校の工業科の廃止は日大本部の意向で"本決まり"といわれ、存続を求めている電気科同窓会代表奈良橋慶行さん（三四）らの話では、学校側は「工業科の進学率が高くなり、その大部分が三島短大工科だったが、短大工科が廃止された現在、工業科の存在価値が薄れた」ことを理由にあげているという。

こうした動きを知った同窓生たちは六月下旬から三島、沼津市内の同窓生宅に集まって対策を話し合った結果、①地域社会の要請で設立した工業科を一時の時勢で見限ってわずか十九年で廃止することは工業教育そのものの否定で、絶対に承服できない②工業科の卒業生四千三百人が地域社会で、立派に中堅技術者として活躍し、十分にその根をおろしてきた時点で、この根を断つことは社会的見地からも損失であり、また卒業生、在校生もよりどころを失う③高校進学者の中で、工業課程を希望する人は決して少なくない。正しいPRを通して募集した生徒にその工業教育をなす義務は大きい

同機械科代表　堀江　正紀
同土木科代表　柏木　邦英
同建築科代表　佐藤　正弘

日本大学三島学園長
高梨公之様
日本大学三島高等学校長
橘　和彦様

学校当局の工業科募集停止理由として、

『社会情勢の変動に伴ない、工業科入学希望者が減少した事。三島短大工科の廃止に伴ない、同科への入学ができなくなった事。工業科入学者の大学進学希望者が九〇パーセントを越えた事。』

このような解答をうけ、学校側との会合が再三持たれるなかで、工業四科代表で検討し、同窓会幹事会で話し合った結果、止むなく了承するに到りました。

しかし「今後の工業科同窓生の為にどうしたら良いか」が課題となり、このことについて充分検討した結果を同窓会幹事会の議を経て「要望書」として下記の内容で母校校長宛に提出致しました。

要望書

今般の日本大学三島高等学校工業科募集停止は、我々同窓会としても、最近の社会諸事情により、やむを得ないものもあり、ここで我々は母校が更に発展することを望み、又、努力する所存であります。

学校当局も教育の原点に立ち、進学一辺倒になり、人格の形成を忘れることなく、少なくとも今までの工業科にあった人間的ふれ合いを大切にする生徒を育てることにも注目して下さい。

更に卒業生との関連も重視していただきたく、ここに左記の要望を致します。

一、工業科十九年誌の発刊
一、実習工場等の建物を記念館として存続
一、同窓会室の設置
一、公的書類の有効性を保証
一、専門図書等の利用
一、工業科記念像の建立（ブロンズ像等）
一、工業科同窓会担当者（各科の先生）の設置
土木科・三田村先生、機械科・国府方先生、建築科・杉山徹先生、電気科・石橋先生
一、今回の件についての結果を工業科同窓生全員に学校長、同窓会長、四科会長、他幹事一同の連署で郵送　以上

昭和五十四年七月三十一日

その結果、学校側は要望書内容をほぼ全面的に鋭意その期待に報いるべく努力するということで一致を見ました。学校側からの工業科同窓会員全員にその趣旨を知らせる文書が発送されたのは、みなさまも御承知のことと思います。

今後同窓会として要望事項を学校側と一体になって進めるよう、努力して行かなければなりません。

同窓会全員の協力と御支援をお願いして、以上、運動の経過を簡単に報告させて戴きました。最後に、この運動に協力していただきました父兄の皆様、同窓会幹事のみな様、並びに御賛同をいただきました各位のみな様には、厚く御礼申し上げます。

昭和五十五年二月

時計台できる

第16・17・18期生の卒業記念

高校門を入ると正面に、写真の時計台ができました。この時計は第16・17・18期生の卒業生から、学校の援助を得て、母校に贈られたもので、朝に夕に在校生のために役立っているのです。たとえどんなに忙しくとも、人として時間は守りたいものです。この時計台を永く愛するとともに、先輩の方々のお心を大切にしたいものです。

母校の近況

進路について

昭和五十三年度卒業生も、日本大学進学希望者の85％が推薦入学で進学し、更に一般受験、他大学進学も含めますと、ほとんどの生徒が進路を決定しています。三年生には、マークシートによる模擬試験や夏期講習、統一テスト前の特別強化対策指導など学力向上に力を注ぐ一方、専門学校、就職希望者の理解を深めるなど具体的な幅広い指導により、一層の学力向上に邁進しています。

国際関係学部の開設は、付属高校としての母校の進路にも新たな様相を呈し、地元の要望に応えての活躍が一層期待されます。しかし大学進学の厳しさは、一般の傾向であると同時に、母校でも専門学校へ進む者、就職する者など将来の実質的、具体的な希望に向けて進む者も増えつつあり、同窓生相互の、あるいは先輩の方々の応援があってこそ、母校の地域に根をおく幅広い活躍がみられるものと思われます。最近は、故郷へ住みつき活躍する者が多い傾向にあると言われます。縦に横に同窓会の血の通ったつながりが、ひいては母校の発展に大きく関わってくるものと思われます。

昭和五十四年度 クラブ活動の状況

〔文化・広報関係の部〕

美術部　一九七九年全国高等学校デザイン・写真コンクール　第一位「学校賞」
第十三回全国高校生ポスター・絵画・写真・コンクール第一位「学校特別協力賞」

写真部　全日本高校生ポスター絵画・写真コンクール入選

放送部　第二十六回NHK杯全国高校放送コンテスト全国大会研究発表「第四位」
第十七回全国高等学校放送コンクール全国大会「奨励賞」

〔体育の部〕

バレーボール部
（男子）私学大会第一位
東海総合選手権大会第三位
新人戦県大会第一位
（女子）全国総体県大会ベスト8

バスケット部
（男子）県総体第四位
新人戦県大会第二位
（女子）全日大体育大会優勝

卓球部
（男子）IH県予戦第八位
全日大体育大会第二位

相撲部　東部新人戦第二位

野球部　県私学大会第三位

山岳部　高校総体県大会第六位

水泳部　IH県大会総合（男子第二位・女子第三位）

体操部
（男子）IH県予選第三位

以上各部の団体の内容ですが、個人の活動結果における特記すべきものとして

美術部　'79年全国高等学校デザイン写真コンクール第二席　山本晴美・下山孝

写真部　同　梨田雅人

水泳部　IH東海大会第三位
水野賀寿光
IH東海大会第一位
浜田　恵
国体第五位
須田有美子

バスケット部
国体東海大会第一位
白戸　光治

体操部　国体第六位
長沢　和子
東海総体第二位
内村　政一

スケート部
全国総体県予選優勝
長田　明久

バレーボール部

監督　勝又年男

本校に奉職して以来10年目で、念願の県優勝することができた訳ですが、これも一重に学校をはじめ皆様方の御支援の賜と深く感謝致しております。扨て、この10年間いろいろなことを考えて見ますと、〝バレーボールは人間をつくる〟このことを頭にえがき、毎日指導にあたって来たが、バレーボールを道として選んだ生徒達故に礼儀を重んじ、コートで精神を鍛え、心を練り、やらされる三時間よりも自分から進んでやる一時間の価値をとき最後まであきらめない、心豊かなバレーボールマンを又、人の気持になってものを考えられる、やれといわれたらすぐ行動するプライドあるバレーボールマンの育成を目ざし、現在全国高校選抜大会（春の高校バレー）優勝を目標にガンバッテいます。今後ともよろしく御支援の程お願い申し上げます。

美術部

顧問　田宮達三

全国高校生ポスター・絵画・写真・コンクールにおいて、五年連続学校賞、個人においても、多くの受賞者を出している。地味ながら、着実に歩みつづけている。新鮮な若人の感情を、より豊かに開花させるために、基礎表現技術の習得に、厳しい毎日である。努力・忍耐・執着心のないものに、人の心をうつ作品は、生みだせない。これからも活動を通して、人間・自然への愛や、美しさを、感じとれる心を、育てていきたい。

放送部

顧問　神田　勝
杉山洋三

放送部では八十余名の部員をかかえ、朝、放課後の発声練習、番組作り等活発に活動しております。今年度は第二十六回NHK杯全国高校放送コンテスト全国大会に番組二本、研究発表一本が出場し、研究発表「校内放送の自動化」が全国第四位に入賞しました。また千代田学園主催の第十七回全国高等学校放送コンクール全国大会で番組「青春の足跡」が録音部門奨励賞を受賞しました。以上毎日毎日を一生懸命活動しています。

同窓会の力

幹事長　遠藤日出夫

まずは第二十期生の皆さんの入会を心から歓迎いたします。これで、我々同窓会員も二万一千六百二十一名の大家族となったわけです。実に喜ばしいかぎりであります。何とかこの大家族が一つの大きな力となってこれからの時代に進んで行きたいものです。

さて、千九百八十年は世界的にも大きな問題をかかえてスタートしました。その数々の問題の中には、我々一人一人の生活にも直接影響するものもあるのです。この激動の中にあって我々は果して何をすべきでありましょうか。自己を強くして迷うことなき精神を持つことは言うまでもありません。が、一人よりも二人、二人よりも三人と団結する力は、この不安定な社会にあって、実に心強いものとなりましょう。人間一人一人は弱いものですが、団結はお互いの心に必ず安らぎを与えてくれるものとなるはずです。

日大三島高校を卒業した者同士が、三島を中心とした地域の中にあって、お互いに心のささえとなるように頑張ろうではありませんか。学校という世界を飛び出てみると、言葉では言い尽くせぬほどに多くの山にぶつかります。苦しい時もあるものです。勿論楽しき時もあります。そのいずれにせよお互いに気がるに声をかけられる仲間同士になろうではありませんか。困った時はどうか声をかけて下さい。皆さんの増々の御健闘をお祈りします。お互い大いに頑張ろうではありませんか。

幹事長　遠藤日出夫氏の紹介

昭和五十三年四月より前幹事長高田菊平氏（現在本会会長）の後任として就任、三島支部長時代より持ち前のバイタリティと行動力をもって、本会の発展に貢献し、会長の良き助援者である。

彼は在学中、バスケットボール部に所属し母校創設期の活動の担い手であったし、クラスのまとめ役でもあった。現在は出身地長泉町にあって割烹「静山荘」を経営するとともに「日刊静岡」の支局長を務め、実業の腕も大変なものであり、この方面でも将来有望であると仲間の評判。

（第二期卒業生）

第二十期生　〜歓迎のことば〜

新しき出逢いを求めて

第十三期生　三原加津子

第二十期生の皆さん、御卒業おめでとうございます。一二二六名の新会員を迎え、私達同窓会もずい分多くの会員を有することになりました。現在第一期生も三十八才という働き盛りの年令となり社会の中核をしめ活躍しています。本会も皆さんを迎え、いよいよ活動の基礎を整え、十二支部の活動をもとにお互いの経験をもちよって連携を保ち堅実な歩みをしております。どうしても同じ年代同志のつきあいが主になり、年齢差のある人達との人間関係にはあまり恵まれないと思いますが、同窓会を通してより広い人間同志の出逢いを求めていきたいものです。

一九八〇年代に輝しい未来を持つ二十期生の皆さん、日大三島高校の名を高めるため御活躍されんことを御祈り申し上げます。（母校教員）

〈新入会員挨拶〉

深い友情のために

第二十期生　平井雅臣

三年間の高校生活を終えて、いろいろな友だちができたことを非常にうれしく思っています。さらに卒業後は、同窓会員として先輩方のお仲間に入れていただくことになりました。

高校三年間では同年代の友だちが主でしたが、これからは年代の違う先輩方と人間関係を結ぶわけですから多少の不安はありますが私たちの大きな心の支えになるはずです。

広い人間同志のふれ合いを学びそこから、深い友情を得たいと思っています。この同窓会に入れていただく以上、私たちは同窓会の事業などに積極的に参加するつもりです。

高校を卒業し、これから新しい世界にはばたこうとする私たちは先輩方から見れば、まだまだ未熟者です。先輩方に教えていただくことがたくさんあると思います。

先輩の皆様、新しく同窓会員になった私たちをどうぞよろしくお願いいたします。

二十期生　クラス幹事

三の一	杉山　浩久
三の二	高橋　照二
三の三	山田　泰基
三の四	鈴木　計守
三の五	中山　祿朗
三の六	加藤　進
三の七	池谷　精市
三の八	沖島　治大
三の九	木村　幸哉
三の十	岡ノ谷勝俊
三の十一	河合　隆徳
三の十二	小松　和己
三の十三	小早川　隆
三の十四	片渕　典利
三A	和泉　洋子
三B	吉田麻理子
三C	渡辺美津子
三D	大島さき子
三E	笹原　幸代
三F	稲葉　伸子
三G	小林　美香
三H	波多野悦子
T三A	山田　勝弘
T三B	鈴木　康生
T三C	西面　省治

昭和五十四年度 同窓会の動き

三島支部 この一年

支部長 久保田 光

我が三島支部は、同窓会組織上三島市、長泉町、清水町を含み支部員も地元だけに他支部と比べて一段と多く、全同窓生の二五%にあたる四、八〇〇名となります。

八年前の発足当時は何から手をつければよいのやら、右往左往の状態でしたが支部規約ができ支部幹事も決まり、二年後には若い卒業生を役員に迎えるにつれ、ようやく活気づいてまいりました。

この八年間を振り返ってみますと今後の課題として、支部組織の充実、名簿作成その他数多くあげられます。支部員の増加にともない一市、二町とかなり広範囲にわたる全地区の会員把握はますます困難になる事が予想されます。これらの諸問題の解決策が幹事会の議題にあがる事もしばしばありました。支部役員会で討議の結果、支部運営の円滑化をはかるため次のような方針に従って具体化することになりました。

(一) 三島支部を三分会に分け、それぞれ三島分会(三、八〇〇名)長泉分会(約六〇〇名)、清水分会(約四〇〇名)とする。

(二) 各分会は分会長を選出し、分会長を中心にして行事を運営し分会の名簿を作成する。

三島支部 ─ 三島分会 / 長泉分会 / 清水分会

以上の方針が本年度総会において確認され、支部を充実させる第一歩がスタートしました。

喜ばしい事に総会直後の七月には長泉分会がトップをきって発足した事です。分会長に選出された一期の笠間健史君の努力のおかげと感謝しております。続いて十一月には三島分会が小沢文郎君を分会長として発足しました。両分会とも盛会のうちに発足し、卒業後一、二年の会員が出席者の中にいた事は、今後の発展に力強いものを感じるしだいです。来年度、清水分会発足に向って幹事一同、ひまを見つけては準備をしております。

五十四年度の支部活動は予想以上の成果をあげ実りの多い一年間でありました。

母校二十期生の卒業にあたり新支部会員の支部への積極的な協力を期待しております。

納涼船

七月二十二日

沼津港を夕方出港し、夏の駿河湾を遊覧する納涼行事も我が同窓会の年中行事として定着しつつあります。会を重ねるにしたがい盛会となり、今年は百数十名の方が出席されました。会員相互と家族の親睦の場として、来年も多くの方が参加されるようお願いします。

◇支部長一覧

三島支部	久保田 光	(一期)
田方支部	植田 正年	(一期)
沼津支部	高木 弘之	(一期)
御殿場支部	武藤 康徳	(一期)
裾野支部	勝又 国佳	(一期)
富士支部	西村 雅幸	(一期)
富士宮支部	渡辺 衛	(一期)
清水支部	久保田容弘	(二期)
静岡支部	長島 興嗣	(一期)
熱海支部	谷口 俊司	(二期)
小田原支部	川口 功一	(三期)

スケート部国体で活躍する

小野寺君五千メートル大会新で優勝

部長 前田健一
監督 竹内和博

小野寺君

本校スケート部は昭和四十年に同好会として発足し翌年には部としての活動を認められ、以来県大会では他校の追随を許さず連勝を続けております。全国大会の入賞は椙浦 弘が四十六年度の全国総体で一五〇〇米に六位、四十八年国体で四位、四十九年国体で三位となり静岡県・日大三島の名が注目されるようになりました。五十三年・五十四年と国体二千米リレーに続けて四位入賞したのは天野猶治・後藤憲洋・小野寺正昭・長田明久の活躍によります。小野寺は五十四年の国体五千米に三位入賞、五十五年の苫小牧国体で輝しい全国優勝をなし遂げました。また長田は一万米に八位入賞しました。リンクが学校近在にない悪条件を克服しての優勝に意義がありやれば出来るということが生徒達に感銘を与えました。今後も精進を重ね伝統を維持していくつもりです。諸先生や先輩の御理解と御協力に深く感謝を申し上げます。

工業科の動き

桑原康晃

工業科同窓生の皆様をはじめといたしまして、関係諸氏には昨年の工業科募集停止の最終結論につきまして、母校への多大な愛情と理解をおよせいただき、事務局といたしましては感謝にたえません。

その後、土木・建築・機械・電気、各科共名簿の再確認そして印刷、同窓会開催、今後の課題等、活発に活動をくりひろげ、やっと一段落したようであります。しかし、来年度からの募集停止により昭和五十七年三月をもって同窓生が打ち切りになりますので、工業科としての同窓会の絆をしっかりまとめて、そのまま保っていくか地区別等により、広義的に日本大学三島高等学校出身(内容的に土木を学んだという考え方)というものに有機的に融解していく形をとり工業科としての独自の同窓会を解体するかの考え方もないではない。このように同窓会としての縦のつながりを考え、ピリオドがうたれたときのことを考えざるをえない状態がきている。この現実の最良の方法を今後の各科同窓会などにおいて検討し、大海の小舟にだけはしたくないと思っている。

昭和五十四年度 事業報告

一、総会　四月十五日　於母校
一、幹事長挨拶
一、会長挨拶
一、議事
(1)昭和五十三年度事業報告
(2)昭和五十三年度会計報告
(3)昭和五十四年度事業計画
(4)昭和五十四年度会計計画
(5)役員承認の件
一、懇親会

二、幹事会
一、一月二十七日　於喫茶「欅」
○新入会員入会式の件
○会報の件
二、三月二十四日　於喫茶「欅」
○総会の件
三、六月九日　於喫茶「欅」
○工業科の件
四、七月十三日　於喫茶「欅」
○工業科の件

三、事業
一、二月十九日　於母校八号館
○同窓会入会式
○記念講演会
「負けてたまるか」
松平康隆氏
二、三月一日
○同窓会会報（第八号）発行
三、七月二十二日
○納涼船　於沼津港より
四、支部
一、熱海支部
四月五日　於「新かど」
二、田方支部
八月五日　於「中清」
三、三島支部
十一月二十二日
於「プラザホテル」
五、その他
1工業科説明会　於母校
七月六日
七月二十八日
七月三十一日
2事務局会　六回
3工業科幹事会
六月九日　於「欅」
4職域部会（中学教員）
十月二十四日
於「田代グリル」
5七期生同窓会
九月二十三日
於「プラザホテル」
6工業（機械）同窓会
九月二十四日　於母校
7工業（電気）同窓会
十月十日　於母校
8工業（土木）同窓会
十一月三日　於母校
9その他各クラス、各クラブ同窓会

○納涼船の件

〈思い出〉

生物部に生きたころ

第五期生　足立公生

みんな覚えてるかなあ。伊豆箱根の前から二輛目……。ガタガタ揺れたっけ。次の駅で乗って来る娘を目当てに、いつも同じ時間の同じ場所で頑張っていたヨッちゃん。

部活が苦しくて、ついに下宿した三年生の時は、もう毎日が採集の連続だったっけ。

部屋の窓を開け放って虫の飛来を喜んだり、クサカゲロウの産卵を一晩中見ていて遅刻したこともあったじゃないか。僕の部屋に何人も集まって、産み着けられるウドンゲの花の美しく怪げな力に引きつけられた夏の夜。

そうそう、ヨシカズの奴がエビヅルの実を採って来て、ブドウ酒を作ったっけ。そうしたら、ビンに固く蓋をしたもんでバクハツしちゃってさあ。オバサンに叱られたっけ。

夜になると、あきもせず毎晩歌をうたったもんだ。覚えてるかなあ。いつもみんなと一緒に騒いでオジサンに怒鳴られた。あの下宿あれは僕の希望の館さ。僕には入試勉強の想い出なんか忘れちまったよ。

（母校教員）

第一回七期生同窓会を開催して

七期会長　中山慶栄

卒業して、はや十三年が過ぎました。まったく「光陰矢の如し」と云った感じです。

ところで私達七期生同窓会を昨年、九月二十三日「三島プラザホテル」で最初の会をもちました。時間は夜六時からで、私達役員は胸をときめかしながら受付で同窓生の来るのを待ちました。私は、一人一人の顔を見ていくうちに高校時代の事が頭の中を走馬燈の様に駆け巡りました。恩師の先生方や、生徒会の友達や、クラスの友達の事とか、校内での大きな出来事などが、次々と浮かんでは消えまるでタイムマシンで高校時代に戻った錯覚すらしました。集った仲間は七十名余り、そのうち女性が二十名程で、会は花が咲いた様でした。皆学校時代の話で盛り上りあっという間に時間が過ぎてしまい話は尽きませんでした。

この会を催すにあたり、御尽力下さいました学校当局の皆様や、役員の方々には、誠に心から御礼を申し上げます。これからも二回、三回と会が、大きく広がります様皆様方の御協力を願うしだいで有ります。

記念講演

負けてたまるか!!

松平康隆氏

昨年行なわれた同窓会入会式に於て、現在日本バレーボール協会の専務理事、又、全日本チームの総監督である松平康隆氏を招き、卒業生を前に講演をされた訳ですがミュンヘンオリンピックで日本バレー会に初の男子金メダルをもたらした事や、テレビの解説等でおなじみの方だけに、生徒も約50分間松平氏の話に聞き入っていた。

〝人間、やるとやらないのでは大ちがいである。とにかく人間何事をもやらなければだめだ〟卒業生もこれからの人生の中で氏の話は大変プラスになった事だと思う。又松平氏には大変お忙しい中を本校に来て下さったことを、深く感謝致しております。

日本大学三島高等学校

同窓会規約

第一章　総　則

第一条　本会は日本大学三島高等学校同窓会と称する。

第二条　本会の事務所は、これを日本大学三島高等学校内に置く。

第三条　本会会員は、日本大学三島高等学校の卒業生をもって正会員とし、現教職員および元教職員をもって特別会員とする。

第四条　本会は、母校建学の精神にのっとり会員相互の親睦と融和を図り、母校の発展興隆に寄与することをもって目的とする。

第五条　本会は、前条目的達成のために左の事業を行なう。
一、会員相互の親睦と融和をはかるための各種行事
二、母校の発展興隆に関する各種行事への協力・参加
三、その他、目的達成のために必要な諸行事

第二章　機　関

第六条　本会は、事業遂行のため左記の機関を置く。
一、総会　二、幹事会　三、支部会　四、事務局
五、編集委員会

第一節　総　会

第七条　総会は本会運営の最高決議機関である。総会の議事は出席会員の過半数をもってこれを決する。
但し、必要により各支部を代表する支部長をもって、総会の決議にかえることができる。

第八条　総会は本会運営についての立案実行の一切の事務を幹事会に委嘱する。

第九条　総会は四月一日より翌年三月三十一日までの年度一回、会長がこれを召集し、幹事会、会計監査の所管事項の報告をうける。但し、緊急を要する事項に関し、会長が認めた時、又は会員多数の要求があった場合、会長は臨時に召集しなければならない。

第二節　幹　事　会

第十条　幹事会の運営機関として左記の事項を立案し総会の承認を経たのちこれを実行する。
一、予算・決算に関する事。
二、事業計画に関する事。
三、会則の改廃に関する事。
四、その他、第五条によって必要と認めた事項。

第十一条　幹事会の召集は幹事長が行ない、年三回以上、原則として過半数の幹事出席のもとに開催する。また、幹事長は幹事の三分の一以上の要求があった場合は、臨時に幹事会を召集しなければならない。

第十二条　幹事会には幹事長一名、副幹事長二名、庶務・会計二名、その他、必要とする役職を置き幹事会の互選により選出する。

第十三条　幹事会に常任幹事会を設ける。常任幹事会は幹事会の役職員ならびに常任幹事によって構成され、必要により幹事会にかえることができる。

第十四条　幹事会は本会運営上、必要と認めた場合に臨時に特別の機関を設けることができる。

第三節　支　部　会

第十五条　本会は各地区に支部会を設け、本会の目的達成の推進を図る。

第十六条　支部の運営については、本規約に準じ細則は各支部によるものとする。

第四節　事　務　局

第十七条　事務局は幹事会のもとで本会運営を円滑ならしめるよう務める。

第十八条　事務局は幹事会より委嘱された者をもって構成する。

第五節　編　集　委　員　会

第十九条　編集委員会は幹事会に所属し、原則として年度一回の会報発行、その他、本会運営上、必要なる広報の任にあたる。

第二十条　編集委員会は幹事会より委嘱された者をもって構成する。

第三章　役　員

第二十一条　本会は左記の役員を置く。
会長一名　副会長一名　幹事長一名　副幹事長二名　幹事、常任幹事、会計監査二名

第二十二条　会長、副会長は、幹事会の推選により、総会の決議をもって選出する。会長は本会を統理し、副会長はこれを補佐する。

第二十三条　幹事長は幹事会を代表し、本会運営の責任を負う。

第二十四条　副幹事長は幹事長を補佐する。

第二十五条　幹事は各卒業学年の代表者が当たり、学年の意見を代弁し併せて会務を分担する。

第二十六条　常任幹事は各地区支部会の代表者が当たり、地区の意見を代弁し併せて会務を分担する。

第二十七条　会計監査は総会において選出され、経理を監査し、総会にその旨を報告し承認をうける。

第二十八条　各役員は総会の承認を経て、その任につき職務にあたる。任期は二年とする。但し、重任はさまたげない。

第四章　会　計

第二十九条　本会の経費は会費ならびに寄附をもってこれに当てる。

第三十条　正会員は卒業時に終身会費を日本大学三島高等学校会計課に納入する。

第三十一条　本会の会計年度は四月一日より翌年三月三十一日までとする。

第五章　表彰・その他

第三十二条　本会に貢献したものは会長が幹事会の議により、総会の承認を得、これを表彰することができる。

第三十三条　会員として名誉を毀損する行為があったときは、会長が幹事会の議により総会の承認をえ、これを除名することができる。

第三十四条　顧問は会長がこれを委嘱し、本会運営上の諮問に応える。

第六章　附　則

第三十五条　規約の改廃については幹事会の議により、総会の承認をえて行なう。

第三十六条　制度施行　昭和三十六年三月十一日
改正施行　昭和四十七年四月一日
改正施行　昭和五十三年四月三十日

表彰規定

前文　本規定は日本大学三島高等学校同窓会規約第五章三十二条に基き、その適用細則を定めたものである。

第一条　本会々員にして、社会的に顕著な業績をあげた者に対し、所定の手続きを経て表彰することができる。

第二条　日本大学三島高等学校に在籍する者で、将来、国家社会に貢献し、母校及び本会の発展に寄与できる有為な人物及び団体に対し、奨学金又は奨励金を支給することができる。

(一)　奨学金の支給をうける者は、最終学年に在籍し、在籍期間中、学業成績・人物・自治活動・健康に優れ有為な人物として学校長より推薦された者とする。ただし奨学金は一名を原則とする。

(二)　奨励金の支給をうける団体は、生徒会所属の団体で、顕著な業績をあげ更に一層の充実・発展が期待されるものとして、学校長より推薦された団体とする。ただし奨励金は一団体を原則とする。

第三条　第一条、第二条の表彰式は、年度末とし、総会または入会式に行う。

付　本規定は昭和五十二年二月十二日より施行する。